

Review: 建築の境界線 part2 —超高層ビルは建築か?—

(発表: 古澤えりさん)

深津龍一

平成 28 年 7 月 1 日

今回の古澤さんの発表は自身の卒業研究で作製したモデルを通して超高層ビルは果たして建築なのかどうかを問うものであった。一般的に超高層ビルは耐震やエレベーター等の必要条件を設計するためにある程度形状が決まってしまう建築ではないのではないのか、という疑問が抱かれている。そこで古澤さんは必要条件から形状を決めるのではなく、独自の考えで先に形状を決めてから他の条件について考慮するというプロセスを踏んだ。

本発表はプラグ・イン・シティをもとにしたプラグ・アウト・シティというアイデアからモデルを作製することから始まった。プラグ・イン・シティとは簡単に取り換えられる消耗品のカプセルを基幹施設に取り付ける形態であり、これをもとにしたプラグ・アウト・シティとは住居が簡単に移動ができ、基幹施設やインフラをコンセントのように扱うことで生活をする際はそのコンセントにプラグを差し込んでサービスを受け取るアイデアである。この形態の大きなメリットは引っ越しをするときに住居を変える必要がなく、さらに引っ越し先でプラグを差し込むことで即座にサービスを受け取れるというところにある。しかし、住居を簡単に移動させる方法や基幹施設やインフラをどのようにしてコンセントのようなものにするかが大きな問題となってしまった。そこで一旦このアイデアをやめ、まずは土地から決めることから始め、最終的に六本木付近の Y 字型になっている首都高速 3 号渋谷線に囲まれた土地に決まった。この土地周辺では現代的な高層ビルや下町が混在する空間になっていて独特な雰囲気醸し出していた。下町のような存在を建築者が設計したものから独自に発展したものとして「雑菌」と呼んでいる。この「雑菌」は建築関係者に愛でられることが多く、よく興味の対象となっている。もともとこの土地には開発により高層ビルが建つ予定であったのでこの土地に建てる高層ビルのモデル設計をテーマとした。レム・コールハースは高層ビルのようなスケールの建築物は外部と内部とで空間が遮断されていると主張しているが、古澤さんは遮断されないような高層ビルを作れないかと思案錯誤をして足が五つあるような高層ビルを提案した。五つ足高層ビルの形状の作成方法や層ごとの活用の仕方等を提案することでこの高層ビルを正当化しようとしたが、様々な問題点を指摘されてしまった。イプシロンの質疑では上層に富裕層、下層に貧困層が生活するようになってしまい階級が明確化してしまうのではないかと、という懸念がされた。

私の分野では要求される性能を満たすように機器を設計するのが基本的だが、建築では耐震等の安全のための条件を満たすように設計するだけではないのだと改めて考えさせられました。高層ビルの下に空間を確保することで外部と遮断されないよう図ったり、ビルの足の層と足が連結する層とで活用の仕方を変化させる工夫など、今までの高層ビルにはないようなアイデアで溢れていて実際に建てられたら訪れてみたいものであった。この「訪れてみたい」という好奇心を生み出すには安全性のみを考慮しているだけでは生まれにくいものである。しかし、今まで見たことのない独特な形状故に、特に地震の多い日本では、本当に安全なのかどうか疑う人々が多く現れそうである。また、イプシロンの質疑でもあったように外部との遮断がないために下層と上層とで貧富の差が明確に現れる可能性があるという問題もある。これは周囲に直接悪影響を与えているわけではないが自分の地位が客観的に示され不快に思う可能性がある。一方で上層へのし上がろうという人間が訪れる可能性もある。このように人間の心理についてもある程度考慮しなければならない点は私が専門としたい通信ではあまり考慮されない事項であり非常に興味深かった。